



長い柄のついた大包丁でクジラを解体する捕鯨会社の作業員 (写真集「クジラ解体」より)

クジラ解体の写真集出版

世界で捕鯨の是非をめぐる議論が続く中、写真家の小関与四郎さん(75)がマッコウクジラの解体現場などを撮影したモノクロ写真集「クジラ解体」(春風社、1万5750円)が出版された。昭和63年に商業捕鯨が規制される前の写真が中心で、日本の捕鯨文化を伝える貴重な資料として注目されそうだ。

A4判208ページですっきり重い。写真集の目玉となる陸での解体風景は、千葉県南房総市の和田浦港で61年に撮影。「解剖さん」と呼ばれる捕鯨会社の作業員らが、なぎなたのような長い柄の大包丁で、つやつやと黒光りするクジラの頭や、分厚い脂肪の層を切り落とす光景などを生々しく伝えている。

商業捕鯨中止が近いことを知り、和田浦港に赴いたという小関さん。「血のりに足を滑らせながら、クジラがみる



砂浜でクジラを解体する捕鯨会社の作業員(同)

「ありのままを見て議論してほしい」

みる切り分けられていくのを無我夢中で撮った」と当時を振り返る。

「捕鯨の是非を頭だけで判断する前に、ありのままを見てほしい。議論するための役に立つのなら出版の意義がある」と話す。

数年前に写真の存在を知り、出版に踏み切った横浜の学術出版社、春風社の三浦衛社長(53)も訴える。「ほかの生き物を殺して食べることで人間は生きているという事実を見つめ、捕鯨をめぐる議論のたたき台にしてほしい」

小関さんは出版に当たり、現在も和田浦港で公開されているツチクジラの解体や、古式捕鯨発祥の地として知られる和歌山県太地町の史跡など、捕鯨にまつわる現代の風景もあらためて撮影、写真集に盛り込んだ。

昨年6月の国際捕鯨委員会総会は、日本など捕鯨支持国と反捕鯨国の「歴史的な和解」に失敗。反捕鯨団体「シー・シェパード」の妨害を受け、日本側は今シーズンの南極海での調査捕鯨を打ち切るなど、混乱が続いている。

大規模な商業捕鯨に反対している環境保護団体グリーンピース・ジャパンは写真集について「日本の伝統的な捕鯨文化を否定するわけではない」とコメントしている。

問い合わせは春風社 ☎045・261・3168。